

『狐物語』第十一枝篇の構成

— 武勲詩への導入部に於ける —

福 本 直 之

一名「皇帝ルナール」とも呼ばれている第十一枝篇は『狐物語』全枝篇の中で最長の作品である¹⁾。諸大家の評価は従来この枝篇に対して決して好意的ではなかったが²⁾、昨今いろいろな角度からこの作品を再吟味する試みが見られるようになった³⁾。筆者も『狐物語』の翻訳に際しこの枝篇を担当した経験から、その試みの必要性に気づいた一人である⁴⁾。本稿では個々の問題の考察に入る前段階として、枝篇の構成全般の概観を行なっておきたい⁵⁾。

第十一枝篇の構成は大別して二つに区分される。別称のようにルナールの帝位篡奪を描いている武勲詩仕立ての合戦絵巻である後半部と細々としたエピソード群を盛り合わせにした前半部である⁶⁾。前半部に盛り込まれているエピソードの多くは他の枝篇のイメージと結びつくものが大半で、作者がどの程度まで『狐物語』を読んでいたかを示す目安にはなっている。主たる物語を展開するための導入部としていくつかのエピソードから成る序奏を用いる手法は他の枝篇にも多く見られるところであるが、この枝篇の場合はどのように理解すべきであろうか。エピソードの性格から見ても、後半の武勲詩にとっての直接の導入部と見なせる部分はせいぜい、vv.1537-1756の個所程度なのである。それでは前半部の約1500行に及ぶエピソード群の意義はどのように解釈出来るのだろうか。第十一枝篇の作者は、読者への気配りゆえか、先づ伝統的な「狐物語の世界」をさまざまな既出のエピソードを使って展開させて見せる事から始めている。しかも有能な作者は、例えば第六枝篇の作者のように使い古されたエピソードのレジユメを並べるのではなく、彼流にアレンジした一群の挿話を創作するのに成功している。そして読者が焼直しや敷写しの連続に食傷しだした頃を見はからって、全く新しい構想であるルナール武勲詩の世界へと読者を誘い込むのである。そこに展開されるのは決して武勲詩のパロディーではなく、純然たる武勲詩そのものなのである。

先づ、前半部のエピソード群の各々を個別に取上げてみよう。

1) 書出し (v. 1~40)

身ごもっている妻と飢えに泣く子等のために獲物を求めて出かけていくルナールの場面からこの枝篇は始まっている⁷⁾。

Devant lui voit venir Rovel / Son filz qui de fain va plorant, / ... — D'enfant ai
tout le ventre plain, / Si ai certes isi grant fain / Que j'en euit perdre mon
enfant."

(v. 10-25)

2) ルナールとイザングラン夫妻 (v. 41~270)

作者は『狐物語』のサイクルの最初期に見られる、少く共表面上は仲のよい伯父、伯母、甥の
関係にある両者を採用している。

ルナールは伯父の危難に高見の見物を極めこむ⁸⁾。

Lors s'est en .I. buisson assis, (v. 113)

相棒をひどい目に合わせておいてルナールは白っばくれて上機嫌で再び登場する⁹⁾。

A haute voiz s'en vet chantant / Une chançon toute novele

D'amorettes qui mout ert bele. / .I. chapelet ot en sa teste,

Mout mainne grant joie et grant feste / Et fait semblant que riens ne sache

D'Ysengrin ne de son donmage.

(v. 170-176)

3) ルナールと黄いちご (v. 271~337)

有名な「ルナールと青ぶどう」に連なるエピソードであるが、Br. II の Tiècelin の冒頭に出
ている居心地のよい場所のトボスや¹⁰⁾

"Par foi, fet Renart, il me semble / Que ci se feroit bon logier, / Qui des meures
voudroit mengier, / Mout s'i feïst bon osteler."

(v. 282-285)

Br. XVI の堀のイメージが自然に浮かんで来る¹¹⁾。

Enz en la fosse saut debout, / ... A val le covint a venir, / ... Ainz ne fine jusque
au fonz fust / De rooler tout contre val;

(v. 294-301)

4) ルナールと犬のローネル (v. 338~550)

ルナールがローネルを欺して木の枝に吊るす小話 (v. 338~419) は直ちに Br. X, v. 439-587
を思い起こさせるし、後半の国王一行によるローネルの救出と蘇生も同様である (cf, Br. X, v.
874ss)。

5) ルナールと鳶の家族 (v. 551~626)

空腹のルナールは鳶の子供を四羽平げてしまう。それを知って怒り狂った鳶夫婦はルナールに
猛然と襲いかかり、大いに痛めつけるものの夫婦共々ルナールに返り討ちにされてしまう。作者
はこのエピソードを Br. VII で知っていたと思われるのだが¹²⁾、

Mes il s'en voudra bien vengier,

(v. 563)

と出典不明の動機を挙げている¹³⁾。

6) ルナールと騎士の一行 (v. 627~735)

Br. III-1 の魚屋の皮算用が騎士とその従士達に写しかえられている。しかもルナールを逆さ
吊りにしてひた駆ける場面は第 I 枝篇の兎のコワールのそれと重複している¹⁴⁾。

Renart porte que pas n'agree / Ce que il tient si malement / Que par les piez con-
tre val pent;

(v. 680-2)

7) ルナールと雀のドロアン (v. 736~1389)

- v. 736-764: ルナール, 自分で傷を癒す。
- v. 765-818: ルナール, 雀のドロアンにさくらんぼを取ってもらう。
- v. 819-970: ルナール, 雀の子に洗礼を授けると欺し, 食べてしまう。
- v. 971-994: 雀のドロアン, 助っ人探しの旅に出る。
- v. 995-1389: 雀のドロアン, 犬のモランの助勢を得てルナールに復讐を果たす。

第十一枝篇の前半に盛り込まれている小話群の中で一番まとまりのある, よく出来たものがこのエピソードである。独立した一つの枝篇となり得る内容と量を備えている。そして Br. X 「医者ルナール」のイメージにしたがって雀のドロアンにとってのルナールは先づ諸芸に通じた学識者である。ルナールも自らの医師の技量を自賛している¹⁵⁾。

J'ai passé la mer d'Engleterre / Por le roi .II. foiz, voire .III. / Je fui en la terre as
Irois, / Tant alai cerchant la contree / Que j'oi la mecine trovee / Dont li rois fu
gariz et sains; (v. 868-72)

生気溢れる会話体も作者の力量の並々でないことを示している。子供を食われたドロアンとルナールのやりとりなどは秀逸である。

"Renart, fait il, ou sont mi fil? / Je cuit fait m'en avez essil. / — Non ai, ainçois
sont ça a aval. / — Haï! traître desloial, / Fet Droïn, tu les as mengiez. / — Non
ai, fet Renart, ce sachiez. (...) — Tu es fox, il s'en sont volé. / — Volé? non sont.
— Si sont, par foi. (v. 907-16)

8) ルナールと狼イザングラン夫妻 (v. 1390~1536)

イザングラン夫妻に救出されたルナールは二人の手厚い看護のおかげで元通りに全快する。作者はここではルナールとエルサンを伯母-甥よりも一歩近づけたものに設定している。

A tant es vos dame Hersent / Sa conmere qui tant l'amot, / En son cuer amis le
clamot, (v. 1390-92)

9) ルナールと楯持ち (v. 1537~1596)

10) ルナールと蝸牛タルディフ (v. 1597~1646)

11) ルナール, 国王の伝令と出会う (v. 1647~1688)

12) ルナール, 従兄弟のグランベールと出合い, 彼を楯持ちとして王宮に向う (v. 1689~1712)

13) ルナールの長男ペルスエ, 母エルムリーヌの死を報ずる (v. 1713~1756)

9)~(13) はその次に登場するルナール武勲詩への橋渡しとなる具体的序奏部として大切な役割を果たしている。しかも, もう一つ注目すべき点はこれ等のエピソードは全て作者の創造にかかるもので, 1)~8) に見られるように先行枝篇に既に用いられている場面やイメージの敷衍しや移しかえではない事である。9)~10) を通じてルナールは武勲詩の登場人物に不可欠な乗馬, 鷹, 換え馬, 刀, 槍, 楯を入手している¹⁶⁾。11) で国王の伝令から伝えられた内容は直ちに披露されるのではなく, 13) のペルスエとの会話の中でさりげなく紹介される事となる。

Que au roi mout grant guerre sort. (v. 1745)

12) での従兄弟グランベールとの出会いはルナールに最もふさわしい楯持ちを提供することになるし、10) のタルディフの死は後に諸侯の武者揃えの個所で旗奉行の後任が話題となるための伏線となって活きるのである。

Mes mesire Tardif nos faut, / Qui n'est pas encore venuz. / Ne sai por quoi s'en
est tenuz." (v. 1870-72)

更に、13) で早々にいささか唐突気味に用意されているルナールの妻エルムリーヌの死は、ルナールと王妃フィエールの再婚に備えるための伏線として働いている。

他の先行枝篇でのイメージの影響の下に書かれたと推定される1)～8)からは、I, II, III, VII, X, XVI, XXIV についての作者の知識が想像されるが、これ等の余りにも長すぎる導入部は第十一枝篇の中心テーマと目されるルナール武勲詩、なかんずくその合戦絵巻にとっては何等直接的な関連性を持っていないのである。9)～13)の具体的導入部による序奏を経て、ノーブル皇帝が否応なく巻き込まれることになる二大合戦絵巻の幕が切って落される。その一は異教徒の侵攻を撃退して、味方大勝利に終る戦い (v. 1757～2303) であり、それに続くもう一つの合戦は逆賊ルナールによる皇位篡奪のために生じた内戦 (v. 2304～3380) である。前者が野戦、後者は攻城戦に設定されているこの二つの合戦の描写からもいくつかの興味ある問題が指摘出来るが、ここではこの枝篇が当時のオリент情勢に関する次のような意味ありげな言及で終わっている点に注目しておこう。

Puis fu il (=Renart) si bien du roi Noble / Que tuit cil de Costentinoble, / Par
parole ne par mesdit, / Issi con l'escripture dit, / Nel feissent au roi meller / Por
riens qu'en li seüst parler, / Mes entre eus mout grant amor ot. / Li contes fenist
a cest mot. (v. 3403-10)

NOTES:

- 1) éd. Martin = 3402 vers; éd. Roques = 3328; éd. F-H-S = 3410.
- 2) 例えば、L. Foulet: "C'est une chanson de geste de la décadence ..." (*Le Roman de Renart*, p.457); J. Flinn: "... le conte de Renart est devenu une pauvre imitation de la chanson de geste." (*Le Roman de Renart*, p.98)
- 3) 例えば、R. Bellon, *Renart empereur*: un épisode peu connu du *Roman de Renart*, in "Mélanges Jean Lanher," pp.257-65.
- 4) 第十一枝篇の訳文は紙面の都合上、鈴木覚、福本直之、原野昇訳『狐物語』(白水社、1944年)には入っていない。
- 5) 以後、特にことわらない限り枝篇の呼称は Martin に従い、例文の引用は éd. F-H-S によるものとする。
- 6) 前半部は vv.1-1784, 後半の Renart 武勲詩は vv. 1785-3410 を占めている。
- 7) Sa mesnie ert en si mal point / Que de fain crioit durement. / Sa fame Hermeline ensemment, / Qui estoit de novel ençainte, (Br. XVI, vv. 24-27) L. Foulet は Br. XVI の制作年代を Br. XI より後に推定している。(cf. *op. cit.*, p.117-8)
- 8) Lors s'est en J. buisson fichiez, (Br. III-3, v.25) 背景は明らかに Br. III から借用されている。
- 9) Renart s'en vint esbanoier / En la meson mout lieement, / Son oncle trove mout dolent. (Br. XXIV, v.254-256)
- 10) A bon ostel est herbergiez, / Ja ne le quesist rechangier, / S'il eüst assez a mengier. / Li sejourner i

estoit biax. (Br. II -5, v.12-15)

- 11) Est il dedenz l'eve cheüz. / Il ot grant peor de noier, / Si conmença a patoier, / Que volentiers en issist fors. (Br. XVI, v.1010-14)
- 12) J'estoie ouen en .I. essart, / Si trovai .IIII. huaniax / — Je m'en repent: toz les menjai, / Qui erent filz Hubert l'escoufle, (Br. VII, v.800-805)
- 13) 他の個所では鳶は通常 Hubert の名で呼ばれているのに、ここでは鳶夫妻が無名である点に関しては、拙論「狐物語第 VIII 枝篇に就いて」(フランス語フランス文学研究, N°63, 1993) 参照。
- 14) Qar pendant va tot contre val / Par desoz les piez au cheval. (Br. I, v.1485-6)
- 15) Je ai esté par toute Ardane, / En Lombardie et en Toscane / — En Salerne trovai .I. sage / A cui ge dis vostre malage, / Si vos envoie garison. (Br. X, v.1501-13)
- 16) ルナールと蝸牛の確執は第 Ia 枝篇以来のことであり、むしろ恨みを晴らしたい気持をもっているのはルナールの方である。